<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>村上 嘉實</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>人文論究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□□</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>□□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1665年4月10日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10236/4982">http://hdl.handle.net/10236/4982</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
近世においては官と吏がはっきり区別され、吏とは即ち胥吏を意味し、胥吏が官品に列するということは、およ
ど特別の場合をのぞいてはあり得ないことであった。たとえ稀れにそのようなことがあっても、それは例外でしか
かった。例えば清国時代に、胥吏が永年つとめて経承という役につくとき、ずいぶん多くの収入があるので、その金の
力で捐納の制を利用し、一躍して知県などになることもあった（清国行政法家論、第四編官吏法、文官）、また中央
官衙の外務部・商務・内閣・翰林院・宗人府等の胥吏は、その在職の功により、長官の保証により官を得ることもある。未入流に列し、無
品のままで官員に準ぜられ、退職の場合には、在職の功により、長官の保証により官を得ることもある。但しその官
品・外省の雜職にすぎない。その中でも外務部の承発だけは、まれに知県になることがあるといわれる（服部宇之吉、清
吏事の研究）
国通考、第二編。これらは何れも例外に属し、たまに官を得ることがあっても、それ以上に出ることはとうてい出
来ない。このように近世にあたっては、晉官は階級的に固定し、晉吏の身分から官に出進することとは原則としてゆるさ
れないことであった。

然し中世（六朝・隋唐時代）においては、官と吏との間に、右に見るような厳密な区別はなく、小吏より身を起
して官に出進するものも決して珍しくはなかった。殊に六朝時代には、そのような話がしばしば見られる。小吏と
は、通典卷三十六に「自百石以下、有斗食佐史之秩，為小吏」とあり、下級の書記で、後世の晉官の起源となるもので
ある。この小吏について「晩書」には次のように見えている。

孫策は河内棘県の人で、戦国時に県吏となり、郡の太守呉奮に抜擢されて主簿となった。名族の子弟は彼と同坐することを好まなかった。太守はそれを見つめ、同郷の戸隠家の知遇を受け、その密告により石苞の危難を救ったので、後には尚書郞に栄進し、後世の晉官の起源となるもので

時の人を称賛するところとなった（晩書卷三、石苞伝）。

縣官は晋康献皇后の父にあたる、炎の父の治は武昌太守であった。ところが炎の祖父の炎は戦国時に県吏
をつとめる賤しい身分であった。炎のとき炎は県令を除かれたようにして、それで県吏を辞した。しかし家が貧
しく、年は五十才になろうとしていた。そのとき炎と旧知の鎮南将軍羊祜に依頼し、西晋の武帝にすすめられ
られた。彼はそこで局量と才幹により次第に頭角をあらわし、かくて安東将軍にまで栄進したのである。晩
書巻九、外戚伝。續書}

易雄は長沙時陽の人である。戦国時代に出世もおぼつかないと思い、懲しき古は賤し
陶侃が小吏より栄進したことも有名である。

陶侃の父の丹は呂の揚武将軍であったが、侃は早く父をうしなって家を失い、県吏に用いられた。また、まだ

鄱陽の孝廉范逵が上京の途次侃の家を通りすぎた。侃の母は年さかりの賢夫人であったから、すぐに自分の髪を切って酒に易え、徒う家の未に至るまで快くもてなし、

客は歓をつくして立ち去った。侃は范逵にしたがって旅立ち、廬江太守の張煬にすすめられて陸に上り、大臣張華に見えて郎中を任命し、

刺史、長沙郡公の地位に達した。なお陶侃がいまだ儒者を食し、官物を届けるのは益益にみならず、母の憂いをまずするものであると

冊に詰めたという。世説新語、賢媛篇。晋書卷六陶侃伝

また西晋の文士左思については、

左思の家はのもと爵の家族であり、左右公子の一つであったが、のちに零落して、左義（左思の父）は小吏より

身を起こし、ついに殿中侍御史にまで至った。（晋書卷九二、文苑伝、左思）

とする。乱世の時代にはこのように名族の子弟が零落して小吏となり、そこから身を起こして栄進するものもいたので

ある。西晋時代に小吏の栄進として最も著しいものは、八王の乱の趙王倫の幕下におけるものであろう。趙王倫が帝位を
吏事の研究

まったく（晋書巻五十七 『吾彦伝』）また袁宏は注米の運送を業としていたが、また袁宏は初米の運送を業としていたが、たまたま鎮西将軍謝尚が、秋風の月を
まで江に遊ぶ。そこで袁宏が自作品の詠史詩を吟じているのを聞いて感動し、やがて彼は立ち客されて謝尚の軍事
に与かるようになった。それより彼は累進して大司馬桓温の府記室となった。

南北朝時代になると、かかる傾向はさらに甚しものがあるように思われる。趙翼は二十二史剖記において、南北朝
の寒人が機要に与かることを述べているが、その中にも同書には「北斉以殲役為県令」の条があり、当時の事情を
よく示している。それによると、

後魏が中原を支配するや、顚の政をはじめ、明元帝、太武帝はしばしば詔を下して民政を正し、その末
に小階級が県令となるのはこれより始まることがある（元文遙伝）。これより李仲挙・盧昌衡ら八人が、
何れも家柄によって採用され、仲挙は修武県令となって寛明の治をなし、昌衡は平思県令となって恩明の治を
といい、後に趙翼は、「此民の言を以て而もこれを廃役に寄す。袁宏の朝、何事か有るなからん。此れ亦以官世の
変を観るべきなり」といっている。

六朝は門閥中心の時代であり、官吏の登用は九品中正によっていたので、寒門出身の者が栄進することは非常に

世説新語・文学篇、ならびに同注引墳陽秋。
困難ではあったが、その中にあって寒門に機会が委任される路があったことは、貴族の生活状態に原因があるものと思われる。また名族の子弟でも、世の浮沈にあって、己を得ず県令などより身を起して次第に立身する者もあった。即ち六朝時代においては、未だ貴族階級として成立せず、したがって官と吏をとる間の間に明確な区別はなかったのである。

(2) 隋・唐・時代

隋書には小吏より栄進した人がほとんど見えないが、唐代の史書にはそのことが見える。玄宗の代に、牛仙客が小吏より栄進したこととは、まず特筆にあたえる。

玄宗の代に、牛仙客が小吏より栄進したことは、まず特筆にあたえる。

仙客は涇州鶴鳴の人である。はじめ県の小吏となり、県令の博文静にみとめられ、功をつんで洮州司馬とな

年中に朝官に進し、最終的に戸部尚書・同中書門下三品・知門下事・遙領河東節度副大使に任ぜられた。さらに開元

帝に知られ、李林甫のすすめで工部尚書・同中書門下三品・知門下事・遙領河東節度副大使に任ぜられた。さらに開元

し、彼はがんらい微踰の出であるため、貴族の間に容れられず、玄宗が高力士にそのことをたずねると、力士

はたえた（仙客はととぎ、宰相の器に非ず）といった（新唐書卷二三三・旧唐書卷一〇三牛仙客伝）。

右において新唐書は「小吏」と書き、旧唐書は「小吏」と記している。また高力士の言った（仙客本営史、非宰相

器）は新唐書にのみ見える語で、旧唐書には見えない。宰相、宰相の語が隋書および新・旧唐書に多く見える例は、

前回（官と吏＝吏事の研究その一、関西学院大学文学部七十五年記念論文集）にあげておいたが、ここでは論じ

にいたこととき特筆に値することである。次に、

吏事の研究
路嗣恭は、代宗の永泰年間に江州観察使となり、よく財政業務を治めることで称された。彼は州県の間をし、税務に精通してついに顕官に至ったのである（新唐書卷一三八・路嗣恭伝）。

田神功は冀州南宮の人である。元は寒微であり、天宝年間の末に県の里胥となった。たまたま安祄山の乱に際し、しばしば戦いを経て武官に立てたので、工部尚書を検校し、御史大夫を兼ね、汴宋等八州節度使を授けられた。彼の忠勇は当時の称するところであったので、死してのち司徒を贈られた（旧唐書卷一三四・田神功伝）。

白志貞は太原の人である。本名は翟珪といい、胥吏から出て節度使李光弼につかえた。光弼は彼が小心謹直で計画性に富んでいるのを知り、深く信任して幕下のことはみな彼に相談した。光弼が死してのち、代宗に用いられて司農少卿となり、太卿に上り、そこで十余年を経た。次に徳宗から召されてその腹心となり、神策軍使・檢校左散騎常侍・兼御史大夫に昇官し、志貞の名を賜わたった（旧唐書卷一三五・白志貞伝）。

旧唐書に、彼はよく上意を伺っていた。上の言に従わざるはなかったと記してあり、その言方に特別の才能を有していたことがわかる。

劉栩楚は寒微の家から出て吏となった。鎮州の王承宗がその時彼の才を見出し、後に宰相の李逢吉に推薦したのち、本伝には「鎮州小吏」となっている。

そのほか「小吏」とは記してなくても、卑賤の身から立身したものの、韓全義や宰相を元載などがある。唐代には胥吏の身分が次第に固定する傾向にあったから、小吏より出て栄進することは、六朝時代より以上に困難であったと思
二、省官併職の論

吏胥はその事務的能力を利用して種々の悪事をなした。この事例については別稿で示す。吏胥が悪事をなすことの理由については、中国の官僚機構の弱点が、さらに六朝以来の貴族社会に起因するものがあると思われる。何れにせよ、省官併職は、冗官を省き、官職を併合するの意であるが、その中には吏胥の問題がふくまれていることは当然である。

官職を省き、冗官を省き、官職を併合するの意であるが、その中には吏胥の問題がふくまれていることは当然である。
書してその得失をなべきが見える。それで、図で
ばれ、まれに正し人もいるが、多くの薬で
の官は官のためには。今に薬の流を取っている。薬等に薬が
あるとは考ええない。薬二、薬
薬が多く官に用いられていることがある。
薬等薬の流を淘汰すべきを説き、なおそれにつなげる官員をも制限しなければならぬので、それによると
薬を薬の流をやるものをは、その者を民から薬して云ったという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬知の流を薬の流をやるものをは、その者を民から薬して云ったという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
薬薬越南と薬の流を安すのを絶ったという。薬新間薬一
薬知知は薬の即位にあたり薬して薬としたという。薬新間薬一
附

潜の伝に、

胥吏の冗食三千人を懸め省き、米を長安・万年二県に積むこと各々数千万石、年の豊穡を視て歴を発す。

とある。潜は玄宗時代の宰相であるが、当時の胥吏の激増したありさまは新唐書巻二三〇楊琦伝にみ、楊の言として、

憲宗時代に李吉甫は次の如く上奏している。

方今吏を置くこと難しからず。流品は煩雑にして無事の官を存し、至重の税を食む。故に生人は日に疎し、

冗食のもの日に滋し。また国家天宝よりいらい宿兵はつねに八十余万、その去りて商賈となり、度して仏老と

奉ず。而して内外官の雑を仰ぐものには余員なり。職務を重複し、名異り事のまじわるもの甚だ多数。故に

財は日によりて、禄を受くるもの多くし。官は限りありて調に敷きなす。天下はつねに労苦する人三をもって坐待衣食する人七を

万勢いづくくぞらわれざるを得んや。漢の初め郡をおくこと六十に過ぎず、而も文・景の化は三王に

ちかし。則ち郡の少きは、必ずしも政みなれず。郡の多いは、必ずしも事治らず。九流いずくくぞらわれざるを

県は千四百。邑をもって州を設け、郷をもって県を分ず。費広制の細は、化を致す本に非ず。ねがわは

有司に詔してひろく諸郡を設け、州県の併すべきもののあらばこれを併せ、歳時の人仕とむべきものあらばこれ

をとどめん。則ち吏多くなければ治め易し。官すくなければ治め易し。国家の制、官一品は俸三千、職田禄米

をおよそ千石に過ぎず。大僚のとき権臣の月俸九千綿にいたるものあり、州刺史の大々となくみな干綿なり。云
新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  李吉甫

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑伝

新唐書卷一六四  杜佑傳
吏を省くのは省令にしかず、官を省くのは省令にしかず、事を省くのは心を清めるにしかず。清心を

とある。吏員の増加は自然の勢いであったというべきである。

しかしそれぞれの省令は以上のように見えており、その中にあって次の如き例外もある。それは李泌が、参軍を冗員と

みなし、吏員を要員と考えたことである。李泌は徳宗の貞元三年、中書侍郎・同中書門下平章事を兼じたが、初め張

延賞が天下の吏員を減じたため、彼等は懲罰の思いをなし、流離して道路に死するものさえあったので、泌はこれを

復することを請い、上疏していった。

【今戸減するも、事務は平時に十倍している。州県を省くはよろしからんも、吏員は絶対に減すべきではな
い。いわゆる省令は、その冗員を省くことであって、決して常員を省く意ではない。ただ州の参軍は職事が

といったので、帝もこれにしたがい、吏員を復して冗員をEnumerableとある。このことに関連して、新唐書

書卷二七張嘉貞伝、附、延賞によれば、延賞は、当時「官帳し共費広く、州県残物をを以て、宜しくその員を併省すべき」を建

言して許され、その時の詔がのっている。吏員はいかに懲罰をなし、冗員が多々あっても、実際には欠くべからざる存在となっていたから、これを省き去る